双子はこながり地獄の釜は閉ざされる

真夏の最中、蝉しぐれを浴びながら、友人たちと下校中。

友人と笑いあっていた視線を、ふと逸らすと、むかいから白いワンピースを着た女性が。

垢ぬけた格好と雰囲気の美人で、ここら田舎の人でなさそう。

はたして彼女は、ちょうど目があった俺に「あの、ちょっとお聞きしていいですか」と声をかけてきた。

差しだしたスマホの画面には、彼女と年の近そうな若い男。

スマホを覗きこむ俺と友人に聞いたことには「彼、四日前にこの町に

きたと思うんですけど、見かけませんでした？」と。
俺には見覚えなかったが、旅館の息子が「ああ」と声をあげて。
「うちの旅館に泊まって三日前にはでていきましたよ」
「どこに行くか、いっていませんでしたか？」
「たぶん、奈落の底を見にいったんじゃないかなあ」
「奈落の底？」と彼女が首をかしげるのに、こんどは観光会館に勤める親を持つ友人が説明を。
この町の観光名所の一つで、山に囲まれたところに深い崖がある。

高い山に遮られ、陽光が差さないので一日中暗く、崖の底も影がかって見えない。

そのことから「奈落の底」と呼ばれ、また、いいつたえでは、闇におおわれた崖の底には「地獄の釜」があるとされている。

ふだん地獄の釜は、蓋が閉まっているものを、一年に一回、お盆の日は押さえつける力が緩まり、地獄の住人たちが漏れでる危険が。

「それを防ぐため、儀式と祭りをするんですよ。
あとすこしで、その日を迎えるんですけどね」

じつは観光地としてだけでなく、自殺の名所であることでも有名なのだが、友人は口にせず、俺たちもだんまり。

調べるうちに知るだろうものを、おそらく男の行方を捜している彼女に、自らの口で伝えるのはためらわれて。

それ以上、俺たちは男の情報を持っていなかったが「もうひとつ、お聞きしたいのですが」と彼女は食いさがり。

「神田家をご存知で？
名字はちがうとはいえ、どうやら彼、そこの家の血筋らしいんです。
だから、神田家のお寺を訪ねたのですが、門財払いをされて」
神田家とは、昔からお盆の儀式を執りおこなっている一族だ。

葛藤し迷っているうちに、月白の頭がさがっていき、短パンと下着をずらし、俺のをにぎって舐めた。

慌てて「月白！」と頭をつかもうとするも、巧みな舌づかいに「くう、はあ・・・」と体の力がぬけてしまい。

ねっとりと舐めあげ、両手でにぎり扱きながら、先っぽを咥えて頭を上下。

健気に奉仕されて、そりゃあ心身、燃えるように高ぶったが、想像していたより、ずっと手慣れているような。

これが初めてか？と疑うほど。

まさか、ほかの男のもしゃぶったことがある？
もしかして陽赤じゃあ・・・。

「儀式の練習と称して、陽赤と体を触りあい舐めたのでは」と疑念が湧き「ふ、うう、は・・・！」と喘ぎを飲みこんで、月白の肩をつかんだなら押し倒す。

きょとんとするのを睨みかえし、早早、下半身を剥きだしに、顔を接近。
が、咥えようとして、目を見張り硬直。

月白のは毛が生えていなく、幼児のように小さかったから。
背が低く華奢とはいえ、年不相応なそれ。

幼児を犯すような錯覚がして、一瞬、ためらうも、小さくも勃起して濡れているのを見て、また「ぼくは、いいから！」と頭を引っかくのに煽られて、いただきます。

丸々咥えこんで、しゃぶしゃぶしながら、舌をまとわりつかせて、もみくちゃに。

「陽赤より鳴かせてやる！」と躍起になれば、演技なのか「ああ、なに、これえ・・・！」と月白は初心な反応を。

「ぼ、ぼく、小さ、から、恥ずか、ひゃあ、ああ、ああ、ああん、口、おっき、はあ、あう、た、食べ、られ、そ、やあん、や、やあ、吸わな、でえ、あ、あん、ああう、で、でちゃ・・・！」